

路上生活経験のある子どもの 「教育の機会」と NGO

—ニューデリー、NGO ‘SBT’ の事例から—

針塚瑞樹

1 はじめに

6-14歳の全ての子どもに無償義務教育を提供することを定め、2010年4月に施行されたThe Right of Children to Free and Compulsory Education Act, 2009では、全ての子どもに提供される教育を「学校での教育」としている。その背景には、社会的なマイノリティの子どもにも、フォーマルな教育が保障されるべきとの認識がある[NCPCE Government of India 2008: 7]。しかし、2010年までに、義務教育年齢(6-14歳)の全ての子どもに教育機会を提供することを目標としたSarva Shiksha Abhiyan(初等教育普及キャンペーン)では、子どもに提供される初等教育は学校教育に限定されておらず、あらゆる階層・生活環境の子どもたちに、ノンフォーマル教育(以下NFE)¹も含めた教育機会の提供が図られてきた。その背景には、学校教育の拡大にも関わらず、一定の子どもたちに対して、フォーマルな教育が機会を提供できていないため、代替的な教育を提供する必要があるとの認識があった[NIEPA & MHRD Government of India 2000: 46]。

1970年代から、様々な変化を遂げつつ実施されてきたNFEの存在は、教育普及という観点から考えると、フォーマルな教育だけでは対処しきれないという、インドの学齢期の子どもの多様な生活環境、教育格差への現実的対応とも理解できる。NFEを入り口として、教育の機会を得てきたような子どもたちも、学校教育が整備されるにつれて、フォーマルな教育からスタートし、教育を継続することができるようになるのであろうか。「教育」というシステムの中で、困難を抱える子どもが、機

会を提供され、継続できるような、教育の条件を考える必要がある。

そこで、本稿では、学校教育へのアクセスが困難な子どもに対して、NFEの提供がどのように実現されているのか、また、子どもたちが教育を継続し、自立するためには、どのような教育的支援や関与が必要なのか、路上生活経験のある子どもを対象にNFEを行うNGOの活動に着目し、明らかにすることを目的とする²。

2 就学が困難な子どもを対象としたノンフォーマル教育

「学校に行かない子ども期」を過ごす一定数の子どもにも教育を普及するためには、子どもの生活環境に適した教育の必要性が、繰り返し主張されてきた。「ストリートチルドレン」³と呼ばれる子どもの労働や路上生活も、教育の完全普及が達成されない理由とみなされてきた。インド政府は、学校に行っていない子どものための代替的な教育として、NFEを計画・実施してきたのである⁴。1970年代に整えられたNFEは、主に貧しく、非識字で、雇用のない人々を対象とし、「彼・彼女らのニーズを見過ごしにしたままの、フォーマルな教育システムに組み込まれている不平等を取り除くための重要な手段」とされてきた [Shirur 2009: 179]。

1990年代になって、NFEセンターの数と通っている子どもの数は大幅に拡大した。97年に21州で700万人の子どもたちをカバーし、27万9000あったNFEセンターは、その内3万7808センターがNGOによる運営であり、数的には政府によるものが多かった。しかし、NFEの独自性を生かしたプログラムは、NGOによって実践されているという認識の下、政府がNGOに資金を援助するようになってからは、NFEを実施するNGOの数は急速に増え、1997-99年の間に2万以上のNGOによるNFEセンターが設立された [NIEPA & MHRD Government of India 2000: 48-49]。

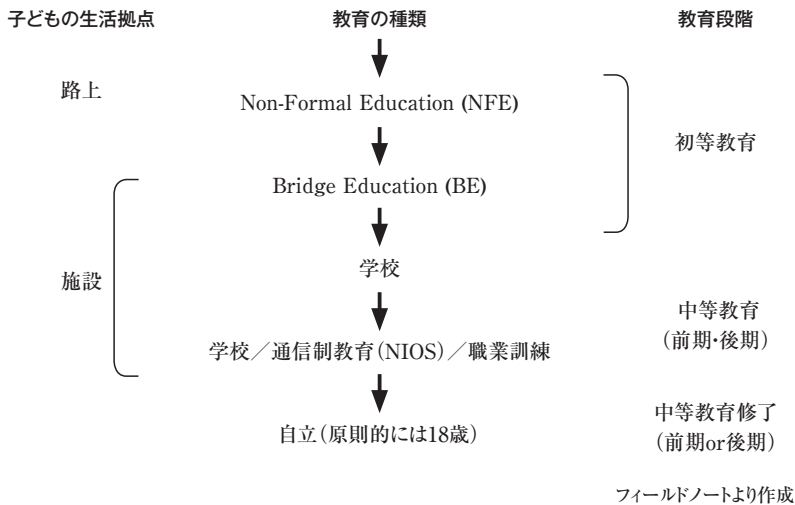
NFEの教育的意義については様々な議論 [針塚 2007] があるが、NFE修了者に対して、フォーマル教育への接続を考えたNFE修了証明書⁵が発行されることから、フォーマル教育への接続は、NFEの目的の一つであるといえる。

3 NGOによる路上生活経験のある子どもの教育

ここからは、路上生活経験のある子どもを主な対象に、NFEセン

ターを運営するNGO ‘SBT’⁶を事例に、NFEを通して、子どもたちを「教育」というシステムにのせ、留まらせる上でNGOが果たしている役割について検討する。‘SBT’の活動目的は、「ストリートチルドレンにメインストリームの生活を保障すること」である。「メインストリーム」とは、家庭と学校を指す。‘SBT’では、子どもにカウンセリングを行い、路上生活の問題に気づかせ、子どもが自ら家族のもとへ帰る、あるいは施設で生活することを選択するよう、支援を行っている。NGOが活動対象とする子どもは、①路上生活をする子ども、②路上生活経験のある施設の子ども、に大別され、‘SBT’が子どもに段階的に提供している教育を簡単に図示すると、以下ようになる。

図1 ‘SBT’の子どもが提供される教育形態



‘SBT’の主な活動は「教育」の名の下に説明されるが、その活動は、子どもが教育を受けることを可能とするための、生活支援全般を含んでいる。以下、活動の内容と特徴について、路上の子どもと施設の子どもの場合に分けて示す。

3-1 ストリートチルドレンを対象としたノンフォーマル教育

NFEの最大の目的は、子どもに路上生活の問題に気づかせ、子どもが自分で路上生活を止めるという選択をするよう導くことである。そのために、NFEの活動の中で、職員は子どもに路上生活の危険性を教え、子ども自らが自分の将来を考えるように「カウンセリング」を行い、子どもが路上を離れるように「モチベート」している。NFEでは、簡単な読み書き・計算、ライフスキルプログラム⁷など教育的要素をもつ活動から、ゲーム、映画鑑賞、ピクニックなど娯楽的要素の強い活動まで幅広く行われている。活動の中で職員は子どもと信頼関係を築き、まずは、子どもが‘SBT’に居場所をもてるよう、将来を見据えた教育の意義を理解することができるよう配慮している。NFEに参加している間は、子どもが路上で習慣にしている喫煙やドラッグは禁止され、歯磨きや入浴が義務づけられる。NFEは、ストリートチルドレンが、最初に‘SBT’と接触する場であり、路上と「メインストリーム」の境界の役割を果たしている。10歳前後で家を出て以来、もしくは家に居た頃から通学していない子どもたちは、NFEに一定期間通った後で、「勉強をしたいかどうか」の意思を確認された後に、「教育」中心の生活へと入っていく。

3-2 路上生活経験のある子どもによる教育形態の選択

NFEに参加する中で、勉強することを選んだ子どもは、‘SBT’の施設で生活しながら、教育を受けることになる。このとき、初等教育段階の子どもには、学校に通うことが推奨される。一定期間学校に行く準備のための教育（BE）を受けた子どもは、やがて通学する。その後、初等教育を修了した子ども、もしくは、14歳以上の子どもは、中等教育段階の教育形態を選択することができる。中等教育を学校に通って修了する子どもは、全体のおよそ3分の1であり、3分の2の子どもが通信制教育（N IOS）⁸をしている。初等教育を学校で終えた子どもの中には、前期中等教育も学校に通い勉強する子どももいるが、途中で通信制教育へと切りかえることも多い。その主な理由には、初等教育段階で就学年数の短い子どもの多くが、中等教育段階の修了試験に落第しN IOSに移ることや、施設を出る18歳という年齢⁹を意識して、職業訓練と並行することができるN IOSを選択することがある。‘SBT’における「メインストリーム」の生活には、「教育」が組み込まれているため、施設で暮らす子どもには「教育」を外れるという選択肢はないが、中等教育段

階になると教育形態の選択は、自分で行うことが求められている。

3 おわりに

路上生活経験のある‘SBT’の子どもたちは、初等教育就学段階で「教育の機会」を自らの選択として経験し、中等教育段階では、教育形態の選択を行っている。教育が普及した社会では、初等教育段階の教育に関する選択・決定を、子ども自身が行うことは想定されていない。しかし、路上で生活する子どもたちは、「メインストリーム」の子どもが拒否することのできない形で与えられる教育を、自らの選択として経験している。‘SBT’におけるNFEは、保護者をはじめとした周囲のおとなにより「教育」というシステムに組み入れられることのなかった子どもに対して、「教育」というシステムを教育するための、教育的活動を中心とした生活全般にわたるケアを含んでいる。

初等教育という早い段階での教育を自分で選択した子どもたちは、中等教育段階の教育形態の選択を18歳での自立を見通しつつ行い、自己実現の道を模索している。‘SBT’が路上生活経験のある子どもたちに「教育の機会」を提供するうえで果たしている役割とは、「教育」を自ら選択する主体の形成と、子どもが「教育」というシステムに留まることを可能とする生活の保障という点において重要である。このとき、「教育」というシステムになじみのない生活環境にあった子どもたちが、「教育」に慣れ親しんでいく過程において、学校以外の選択肢を用意し、教育形態を複線化していることは、できるだけ多くの子どもが何らかの形の教育を自ら選択し、享受できるようにするための対応といえる。全ての子どもにとって、学校が「教育の機会」として機能するには、子どもとその保護者に、フォーマルな教育にアクセスし、継続できるだけの基本的な生活が保障され、「教育」が教育されていることが条件となる。

註

¹ ゴシックの部分がノンフォーマル教育。

National Network of Education ホームページ: <http://www.indiaeducation.net/> をもとに作成。

		Std. I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	XV	XVI	XVII																							
		5	Age 6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25																			
PREPRIMARY	ELEMENTARY EDUCATION										SEC. EDU.		HIGHER EDUCATION																												
	PRIMARY SCHOOL	UPPER PRIMARY SCHOOL										Sec. SCHOOL	Sr. Sec. SCHOOL	Under Graduate Courses		PG UNIV.		M.Phil. PH.D.																							
														B. E. / B. Tech.		M. Tech.																									
														OPEN UNIVERSITY		B. Ed.																									
														MBBS		M. D. / M. S.																									
														PRIMARY TEACHER TRG.																											
	COMPULSORY EDUCATION											TEC. SCH. III		POLY TECHNICS & ITS																											
												OPEN SCHOOL																													
												NON-FORMAL CENTRES																													
	NON-FORMAL CENTRES																																								

² 本稿の考察は、ニューデリーに暮らす路上生活経験のある子どもたちと、彼・彼女らに対して教育支援を行う NGO ‘SBT’ を対象に、2003 年 3 月から 2009 年 3 月の間に断続的に行った計 20 ヶ月間の現地調査により得られた知見に基づいている。

³ ユニセフの定義によると、ストリートチルドレンとは、①両親と一緒に路上で生活する子どもたち、②家族と離れて路上で生活する子どもたち、の両方を指している[Zutshi 2000]。‘SBT’ が主に支援を行っているのは①の子どもであるが、②の子どもも含まれている。

⁴ 弘中[1983]は、ノンフォーマル教育センターが設立されて間もない頃に、その理念と実施状況についてまとめ、当時の学者の間には、インドの社会状況に照らして、フォーマル教育によって教育普及を行うことの限界と、ノンフォーマル教育の積極的意味の認識があったことを指摘している。

⁵ NFE (NFE は通称であり、正確には Open Basic Education) は A, B, C と三段階に分けられており、それぞれフォーマルな初等教育の 3、5、8 年生に相当する教育レベルとみなされる。登録者には NIOS (National Institute of Open Schooling) から認められた NFE センターで試験が行われ、NIOS が発行する修了証明書に、NFE センターの長が署名をする。

⁶ NGO ‘SBT’ の概要

設立年	1988
設立者	Ms. Mira Nair (映画監督)
活動対象	18 歳未満のストリートチルドレン、家出してきた子ども、コミュニティの貧困層の女性・子ども
活動の目的	社会の周辺部にいる子どもたちに対して、安全で、健康的で、ケアされる環境を提供すること
支援を行った人数 (人)	2905 (実数 945)
主なドナー	・米国／インドの NGO ・インド政府／企業 ・国内外の個人

- ⁷ USAID が開発したストリートチルドレンのための参加型教育プログラム。‘SBT’ の職員によると、Life Skill とは、自分の考えを言えるようになること、批判的で創造的な考え方ができるようになること、NO と言える力を身につけること、などである。
- ⁸ NIOS とは、フォーマルな教育制度で教育を継続できない人々を対象とした通信制教育制度のことも指す。初等教育段階の教育歴を問わず、中等教育修了の資格を取ることができる [NIOS 2006: 1-2]。
- ⁹ 活動の中では、子どもの年齢は一つの目安である。様々な場面で、子どもの利益が優先され、年齢だけが判断材料となることはない。

参考文献

- 針塚瑞樹、2007、「インド教育普及キャンペーンにおけるノンフォーマル教育の役割—都市で働く子どもたちを中心に—」、『九州教育学会研究紀要』、35、69-76 頁。
- 弘中和彦、1983、「インドにおける Non-Formal Education Center の発展」、『九州大学比較教育文化研究施設紀要』、34、1-15 頁。
- National Commission for the Protection of Child Rights (NCPCR Government of India), 2008, *Right to Education and Total Abolition of Child Labour: Freedom and Dignity for All Children*.
- National Institute of Educational Planning and Administration (NIEPA) & Ministry of Human Resource Development (MHRD) Government of India, 2000, *Year 2000 Assessment: Education for All*, New Delhi.
- National Institute of Open Schooling (NIOS), 2006, *Prospectus 2006-2007 Academic Courses*.
- Shirur R .Rajani, 2009, *Non-Formal Education for Development*, New Delhi: A P H Publishing Corporation.
- Zutshi, Bupinder, 2000, *Research Report on a Situational Analysis of Education for Street and Working Children in India*, New Delhi : UNESCO-New Delhi.

はりづか みずき ●筑紫女学園大学非常勤講師